

書 評

エム・エヌ・チホミロフ等  
校訂・現代訳ならびに注釈

『クリコヴォの戦についての諸作品』

Повести о Куликовской битве. Издание подготовили  
М. Н. Тихомиров, В. Ф. Ржигза и Л. А. Дмитриев.  
Издательство АН СССР, Москва, 1959. 511 стр. (Литературные памятники)

中 村 喜 和

一三八〇年の九月、モスクワ大侯ドミートリイのひきいるロシア諸侯の連合軍は、ドン河のかなたクリコヴォの野で、ママイ麾下の金帳汗国の大軍を打ちやぶった。バツの指揮するモンゴル騎兵によってキーエフはじめ多数のロシア都市が蹂躪され、東ヨーロッパの広大な地域がその支配下に入ってから約一世紀半のうちに、ロシアは最初の本格的勝利を収めたのである。この戦は決定的なものではなく、いわゆる「タタールのくびき」——中世ロシアではモンゴル人と、その汗国に属する諸民族をタタール人と呼んだ——はこのあとちょうど百年間つづくが、クリコヴォの勝利は、民族の歴史の最も暗い時期における唯一の栄光として、ロシア人の心になく記憶されることになった。アレクサンドル・ネフスキの末子ダニールのひらい

たモスクワ侯国の權威が、ロシア諸侯国のあいだでゆるぎないものになったことも、この勝利のもたらした重要な結果のひとつであった。

中世ロシア文学の特徴は、民族の運命をかけた・周辺異民族とのきびしい闘争に触発され、それをテーマとして、最もすぐれた作品のかがずが生み出されたことにある。たとえば、「イーゴリ遠征物語」は、十二世紀末、南ロシアの侯イーゴリがトルコ系遊牧民ボーロヴェツ(クマン)にたいして企てた不幸な遠征をうたった作品であり、「ネフスキ一代記」は、北ロシアのアレクサンドル侯が十三世紀中頃、ゲルマン騎士修道会の侵入からブスコフ、ノヴゴロトを防衛した勲をたたえたものである。またおもに、剽悍なステップの民との数世紀にわたるたえざる闘争を記念して、ごく最近まで、ロシアの北部地方やシベリヤで語りつがれていたのが、有名な口誦叙事詩ブイリーナである。

クリコヴォの戦は、そのために動員された双方の兵力・直接間接の参戦地域の広さから見て、十四世紀ヨーロッパにおける最大の軍事行動であったが、一八一二年のボロヂノ戦以前のロシアで、これほど多くの歴史記述・文学作品に題材を提供した戦もないといわれる。クリコヴォの戦にかんする作品はつぎの四つに大別される。

(一)「ザドンシチナ」——ドンのかなたの戦ほどの意。作者はリヤザニのソフォーニイ。「イーゴリ遠征物語」の影響がいちじるしい。成立年代は後述するように説が分かれてい

る。伝来写本は五本、ほかに若干の断片。

(二) 「マイ戦記」(年代記記録) シメオン、ノヴゴロト  
第四年代記などの多くの年代記でつたわるクリコヴォ戦の比較  
的簡潔な記録。

(三) 「マイ合戦の物語」 「マイ戦記」を敷衍し、事実  
と想像のもろもろの要素を織りまぜた長大な物語。古来、異  
本の多いことで知られ、最初の成立は十五世紀。

(四) 「ドミートリイ・ドンスコイ大侯聖者伝」 一三八九  
年の大侯の死後まもなく書かれた伝記。クリコヴォ戦の経過  
を記述し、この戦においてドミートリイの果たした役割を強調  
している。ドンスコイはドン河畔の勝利にちなむ諱名。

一九五九年、古典文学叢書『文学の記念碑』の一冊としてモ  
スクワで出版された表題の書物は、右のうちの(一)・(二)・(三)の諸  
テキスト、およびそれらの現代訳・注釈を含み、付録として、  
これらの作品にかんする校訂者等の論文五篇、写本解題などを  
収めている。特に(三)については、基本的な四系統のそれぞれ代  
表的なテキストが完全に収容されていること、エリ・ドミート  
リエフによる詳細な異本研究が巻末に附されていること、が注  
目される。収録されている論文はいずれも単なる作品解説では  
ない。そのためであろうか、今なお問題の多いこれらの作品の  
盛んな研究状況が、この書物からだけではかえって知りにくい  
ということが、不便と言え言えるかもしれない。以下各作品  
の校訂テキストと付録論文にふれつつ、研究の現状と私見を簡  
単に述べてみたい。

## 二

「ザドンシチナ」が『文学の記念碑』シリーズで刊行される  
のは、これがはじめてではない。十三世紀のバツ襲来を記述し  
た「リャザニ荒廃記」、十七世紀のコサツクによるアゾフ攻防  
の物語とともに、『古代ロシア軍記物語集』(一九四九年)にす  
でに収められたことがあるからである。このときの校訂者はヴ  
エー・アドリアノヴァ・ペーレツ、底本は国立歴史博物館所蔵  
の十六世紀の写本(И1と略称される)であった。

元来、一八五二年にはじめてその十七世紀写本が刊行されて  
からというもの、「ザドンシチナ」は「イーゴリ遠征物語」と  
の関係においてのみ論じられるのがつねであった。すなわち、  
後者が真に十二世紀の作品であるか、それとも後代の偽作であ  
るかという問題をめぐって、敵も味方も、その主張の論拠とし  
て「ザドンシチナ」を取り上げたのである。フランスのアー・  
マゾンが第二次大戦の直前、「イーゴリ遠征物語」の信憑性を  
否定したさいも、それを「ザドンシチナ」の模倣作と断定し  
た。レニングラードの老碩学アドリアノヴァ・ペーレツが大戦  
終了後ただちに「ザドンシチナ」研究に着手したとき、マゾン  
批判がその目的のひとつであったことは、たとえば、一九四  
七、八年に発表された諸論文(3) (テキストを含む) からうかがう  
ことができる。

五本の伝来写本は特に最初と最後の部分に出入りがあり、中  
心の基本的な部分にさえかなりの相違がみとめられるが、アド

リアノヴァー・ベレーツが最古の写本たるキリーロ・ペロオーゼロ本(K-B、十五世紀)をさしおいてM1を底本に選んだのも、後者が「イーゴリ遠征物語」との共通個所を最も多く含んでいるからであった。

もっとも、彼女の復元テキスト自体にいくつかのヴァリアントがある。第一ヴァリアント(一九四七年)では貴族ミクーラの邸での酒宴のくだりが後世の成立として冒頭から除かれ、おなじくマイ敗走の描写が末尾に含まれていないのに反し、その翌年の第二ヴァリアントは条件づきではあるが、その双方を収めている。

さて、『クリコヴォの戦についての諸作品』の「ザドンシチナ」校訂者はモスクワ教育大学教授のヴェー・ルジーガである。彼もロシア文学史家のあいだでは最長老のひとりであるが、この作品についての論文は、私の知る限り、一九四六年にはじめてあらわれている。ルジーガによれば、「ザドンシチナ」にはK-B本によって知られる短本系統と、M1本を含む他のすべての写本でつたわる長本系統があり、このうち後者が古形を示し、ソフォニーの原作に近いという。この二系統説はルジーガの創見であるが、まだ一般の承認を受けるにはいたっていない。それにもかかわらず、彼が長本系統のM1を最重要視している結果(本書の底本もM1)、その復元テキストは全体としてアドリアノヴァー・ベレーツの第二ヴァリアントとそれほどへだたっていない。両者を比較して最も顕著な点は、マイ敗走の描写のあとに、「ドミートリイ大侯が「屍の上に」Ha ko-

322 立って味方の戦死者の数をたずねるくだりがルジーガのテキストだけに含まれていることである。(アドリアノヴァー・ベレーツは『古代ロシア軍記物語集』のテキスト——第三ヴァリアント——ではこの最後の部分を含めているが、後代の挿入であると断っている。)

K-B本にたいするM1本の優越はいまやソヴィエト学界の定説となった感があるが、これにたいして、最近なくなったチエコのフルチェクのように、K-B本をオリジナルとみとめる論者もいる。フルチェクによれば、「ザドンシチナ」は古くは勝利をたたえたものではなく、悲しみの歌である。クリコヴォの戦の同時代人はこの戦を勝利とは見ず、のちのモスクワの隆盛がこの戦を勝利のヴェールでつつむことになったのであるという。したがって、ロシア側の戦死者にたいするモスクワの女たちの哀泣をもつて終っているK-B本がソフォニーの原作のおもかげを最もよくつたえている、というのがフルチェクの結論である。これはマゾンの説に近い。マズンはこの考え方をさらにすすめて、「イーゴリ遠征物語」にあらわれているような叙事文学的傾向が中世ロシア文学に無縁のものであることを証明しようとしているのである。

フルチェク、マゾンの意見は年代記の記事などから考えて賛成しがたいが、総じてテキストの問題は、最近特に目立ってきた一群の女性研究者による言語学的研究によって、新しい展開が予想される。それはやがて作品観にも変化をもたらす可能性がある。

- (1) Арианова-Перетц, В. П. (ред.) Воинские повести древней Руси. М.-Л. АН СССР, 1949.
- (2) Mazou, A. La Zadošćina, réhabilitation d'une oeuvre, *Revue des études slaves*, 1938, XVIII, p. 5—40.
- (3) Арианова-Перетц, В. П. Задонщина. К вопросу о реконструкции авторского текста, ИОЛД, 1947 вып. 2 стр. 95—100; ее же, Задонщина. (Опыт реконструкции авторского текста) ТОДРЛ, 1948, VI, стр. 201—255.
- (4) Ржиг, В. Ф. Слово Софонии рязанца о Куликовской битве, Доклады и сообщения филологического факультета Московского Гос. университета, вып. 1, 1946, стр. 37—38.
- (5) Его же, Слово Софонии рязанца о Куликовской битве (Задонщина), Московский Гос. педагогический институт, Кафедра русской литературы, Ученые записки, XLIII, 1947.
- (6) Frček, J. Zadošćina. Staroruský žalozpěv o voji Rusů s Tataru r. 1380 Rozprava literární dějepisná, *Kritické vydání textů*, Praha, 1948.
- (7) Воронкова, О. П. Морфология «Задонщины» по спискам XV—XVII вв. Автореферат диссертации, Л. 1954; Розанова, Т. Формы глагола прошедшего времени в «Задонщине», Ученые записки Великолукского

Гос. педагогического института, 1956, стр. 211—224; Виноградова, В. Л. Некоторые замечания о лексике «Задонщины», ТОДРЛ, XIV, 1958, стр. 198—204.

### III

ルジーガの「ザドンシチナ」論で第一に注目すべきことは、この作品が本来歌謡的性格をもち、語られ、あるいは歌われることによつてつたえられたとされている点である。伝来諸写本のあいだにみられる不一致は、それらが何らかの共通した原本にちかのぼるのではなく、さまざまな時代の伝承者の記憶から書き取られたものたることを示している、と彼は主張する（本書三九八頁以下）。

ルジーガの主張の根底にあるのは、すでに「イーゴリ遠征物語」が楽器の伴奏をもつて演奏される作品であつた、という彼の持論である。これはソヴィエトの学界にまだ支持者を見出ししていないが、はなはだ興味ある意見であると思う。しかしこれとてもまだ仮説の域を出ていない現在、彼の説明は「ザドンシチナ」を散文物語とする伝統的な見解をくつがえすに充分であるとは言いがたい。中世文学の作品に異本の多いことは、かならずしもめずらしい現象ではないからである。

一方、アドリアノヴァ・ハーレーツのように、これを軍記物語として、「リャザニ荒廃記」とおなじジャンルに分類することにも疑問がある。「ザドンシチナ」はその構成と文体から言つて、「イーゴリ遠征物語」のエピゴーネであり、キーエフ・ロ

シャのいわば「武勲物語」である親兵文学(рыцарская литература)の伝統をひくものである。ソフォニーはこの伝統の最後の担い手であったのではないか。これにたいして「リヤザニ荒廃記」の属する軍記物語はキーエフ時代の聖者伝に起源をもち、キーエフとその親兵階級の没落にかわる北東ロシア(のちのモスクワ地方)の擡頭と侯権の伸長とともに成立したと考えられるのである。親兵文学の作品がいずれもごくわずかの写本でしかつたわらぬのに反して、軍記物語が時には数百部にのぼる写本をもつことに注目しなければならない。

なおジャンルについては、最近、アー・ナザレフスキーが「ザドンシチナ」とブイリーナのあいだに親近性をみとめようとしているが、ブイリーナの「枕」によく似ている冒頭の酒宴の場面は、十七世紀の一写本(V)にあらわれているだけであり、ソフォニーの原作とは無関係ではないかと思われる。

ルジガの論文で第二に特徴的なのは、作者の出自についての独特な考え方である。彼はK-B本の表題「リヤザニびとにして *стапу* ソフォニーの書」の *стапу* を「修道僧」とは取らず、単に「老人」と解釈する。ソフォニーはリヤザニ出身の貴族であり、クリコヴォの戦の当時モスクワにあって、ドミートリイの凱旋後まもなくこの作品を書いた、と彼は考えるのである(四〇一頁以下)。その主要な根拠は、「ザドンシチナ」ではリヤザニ侯オレーク<sup>(1)</sup>の裏切りが言及されず、リヤザニへの同情的態度が明らかであること、ソフォニーの名が修道僧らしくないこと、一三七二年オレーク侯が一修道院にあたえ

た恵与状のなかに「アルトゥイクラチの子ソフォニー」という名があらわれること、などである。

今のところ、ルジガのこの説は孤立している。彼の主張の弱点は、「ママイ合戦の物語」の若干の十七世紀写本に見える「リヤザニびとたる主祭ソフォニー」や、トヴヌーリ年代記の「ブリヤンスクの貴族、リヤザニびとソフォニー」という(記入を説明できぬことである。(彼はこれらをすべて誤りとして簡単にしりぞけている。))

従来<sup>(2)</sup>の定説によれば、ソフォニーは南ロシアのブリヤンスクの教養ある貴族で、十四世紀末リトワニアの圧迫をのがれてリヤザニにおもむき、そこで出家した人物とされていた。これは最近、スイスのアー・ソロヴィヨフによってもあらためて主張されており、最も無理のない説明のように思われる。キーエフ・ロシアの親兵文学の伝統は深い森林にかこまれたこの辺境の侯国でその余命をたもっていたのである。

成立の時期について一言すれば、古くは十五世紀説が有力であったが、四十年代の末になって、この作品に当時のブルガリヤの首都トゥイルノヴォへの言及が見られるので、トルコ軍によるこの町の占領(一三九三年)以前に成立したはずであると<sup>(3)</sup>する説が、本書の校訂者の一人チホミロフから提出されて以来、この推定が一般に支持されている。ルジガもここではこの考えにしたがっているようである。

(1) たとえば П. И. Покровский, В. Ф. Неклюк, М. И. Мещеряков по поводу авторства «Слова о полку Игореве», ИОЛД, 1952.

вып. 5, стр. 428—438 を見よ。

(2) 「ザドンシチナ」が軍記物語たる「マイイ戦記」の上に成立したとする一部の研究者の意見には、この点から考へても、賛成しがたう。cf. Орлов А. С. Геронические темы древней русской литературы, обзор стилей «воинских» повестей XI—XVI вв. ИОЛД, 1945, вып. 2, стр. 81; Stender-Petersen, A. Russische Literaturgeschichte, B. 1, München, 1957, S. 156

(3) Назаревский, А. А. «Задонщина» в исторических последнем десятилетия. ТОДРЛ, XII, 1956, стр. 546—  
(4) Соловьев, А. В. Автор «Задонщины» и его политические идеи. ТОДРЛ, XIV, 1958, стр. 183—197  
(5) Тихомиров, М. Н. Древняя Москва, М. 1947, стр. 200—203

#### 四

「マイイ戦記」は最も古くモスクワのトロイツァ年代記にさかのぼるといわれるが、この年代記は現存しない。これと近い関係に立つシメオン年代記中の記事がまもなく潤色されてエルモライ年代記に入った。本書に収められているのは、エルモライ年代記にさらに新しい要素が加えられたノヴゴロト第四年代記中のテキストである。

ロシアの年代記は最初の「過ぎし歳月の物語」からも知られるように、文学的にもすぐれた価値をもっている。それは単

に、諸事実の無味乾燥な記録を年代順に配列したものではない。年代記作者たる修道僧は時に、おのれの興味をつよくかきたる事象にかんして、思いがけぬほど潑刺たる記述をのこしているからである。

筆者はこの作品については他のテキストを直接参照することができなかったが、文学史などの記述によれば、クリコヴォの戦にかんするごく初期の年代記記事は、もっと短く、即物的なものであったらしい。しかし、トロイツァ年代記の記事がいかなるものであったにせよ、本書のテキスト（成立一四〇〇年前後、ルジガ校訂）から判断する限り、「マイイ戦記」はまぎれもなく軍記物語の系統に属する作品である。叙事文学特有の常套形式 formulae の頻出、宗教的傾向の強化がそれを示している。宿敵タールにたいする勝利が伝説のもやにつつまれ、ドミートリイ大侯がかたときも祈りを忘れぬ敬虔なる人物となるために、中世においては二十年もあれば充分だったのである。

現在、「マイイ戦記」はともすれば「ザドンシチナ」のかけにかくれ、テキストについてもそれほど研究がすすんでいないが、十五、六世紀にはむしろ「マイイ戦記」のほうがひろく読まれたと信ずべき理由がある。ロシア各地の年代記が一三八〇年の項にかならず、この作品と関連をもつ記事を書き入れているのはそのひとつのあらわれである。

巻末の論文では、アカデミヤ正会員・モスクワ大学教授のチホミロフが、「マイイ戦記」のもろもろのヴァリアント、そ

他の史料にもとづいて、クリコヴォ戦の経過、およびその歴史的意義を詳述しているが、そこでは特に、黒海北岸のカファに拠るイタリヤの商人たちや、北海のハンザ同盟諸都市が、ロシアの勝利につよい関心を示したという指摘（三五二頁以下）が注目される。

## 五

「ママイ合戦の物語」は中世ロシアで最も多くの伝来写本をもつ作品のひとつである。これは「ママイ戦記」を土台として成立しているが、その上にさらに、記述・口誦さまざまな作品からの影響が見られる。「ザドンシチナ」と全く共通の箇所も二、三にとどまらない。とりわけそれらが口誦詩的表現であることは、中世におけるブイリーナの位置を暗示するものとして、見逃すことはできない。

本書ではチホミロフとドミートリエフがこの作品の校訂と注釈を受けているが、巻末には、ドミートリエフによる論文が附されている。彼は現在、レニングラートにあるロシア文学研究所の若い研究員で、「ママイ合戦の物語」は学生時代からの研究テーマである。

今世紀の初頭、「ママイ合戦の物語」の全写本をはじめて四系統に整理分類したのはエス・シャムピナゴであるが、ドミートリエフは基本的には一応この分類を受け入れつつも、各系統相互間の関係を再検討する。彼の研究によれば、「物語」の四系統は時間的な継承関係にあるのではなく、写本成立の場所、

写字生の社会的地位なども関係して、異本が発生したのであるという（四〇六頁以下）。たとえば、「ママイ戦記」のあとがいちじるしく、シャムピナゴが第一系統と名付けた系統を、ドミートリエフはキブリアン系統と呼ぶ。これには、当時ロシアの大主教であったキブリアンにたいする好意が歴然としており、教会の影響下で書かれたと考えられるからである（成立は十六世紀中葉）。このほか多くの年代記に収められている年代記系統（シャムピナゴの第二系統、十六世紀初めの成立）、十五世紀の初期にはすでに存在し、他の諸系統の母胎となった基本系統（第三系統）、かすかずのエピソードを含む拡大系統（第四系統、成立十五世紀末）がある。

ドミートリエフはさらにこの論文のなかで、「ママイ合戦の物語」の底を流れているのはモスクワによるロシア諸侯統一へのつよい志向であると指摘し、そのような志向が民衆の意志とも一致していたがゆえに、民衆的口誦文学の手法がこの作品にしばしばあらわれているのであると述べている（四六二頁以下）。ロシア文学の社会的性格は、これ以前もこれ以後も変らないのである。

最後に、私見であるが、本書に欠けている文学史的視点から「物語」を見るならば、戦闘の描写が緻密になると同時に類型化していることに注意しなければならない。ドミートリエフ大侯は戦う侯というより、もっぱら祈る侯として描かれる。（たとえば、基本系統の一写本——十六世紀——によれば、大侯の祈ること十回。彼の祈りは作品のかなりの部分を占める。）戦闘

のさなかにはもちろん、奇蹟がおこる。このような宗教的要素は中世ロシアの軍記物語の欠くべからざる特質であった。すでに「ママイ戦記」にあらわれていた軍記物語化の傾向は、まさに「ママイ合戦の物語」において頂点に達したということがで

きよう。

クリコヴォの戦を境として、古いキーエフ的親兵文学は全く消滅し、軍記物語は新しい段階をむかえるのである。

(一九六二・四・一五) (一橋大学大学院学生)